

“レッドスネーク”，カモン！

昔 蛇使い風の男が「レッドスネーク，カモン！」と言って、笛を吹きながら蛇をかごから面白おかしく呼び出す芸芸があった。蛇といっても台座に隠れた人が手にはめた赤や緑のパペットなのだが、蛇使いの軽妙なトークと蛇とのやりとりは、テレビでおなじみのものだった。

日本の蛇といえば、「アオダイショウ（青大将）」や「シマヘビ（縞蛇）」などが有名だ。しかし、漢字で「赤棟蛇」と書く“レッドスネーク”も生息する。

私が初めて見たのは子どものころ。近所の裏山で遊んでいた我々の行く手に、赤みを帯びた蛇が、とぐろを巻いて姿を現した。一同、息を飲んだ瞬間、1人が叫んだ。「ヤマガカシだ!」。—このとき私は、このダンディーな山の住人の名を「ヤマガカシ」と聞き覚えた。

以来、彼とは縁遠かったが、一昨年の夏、子どもがかまれて倒れたというニュースを目にした。まさか毒蛇だったとは!と驚いて読み進めると、彼の名は「ヤマカガシ」とあった。ん? 「カ」と「ガ」の位置が記憶と違う。疑問に思っ事典や辞書を調べたが、すべて「ヤマカガシ」だった。

1つの語の中で音の位置が変化してしまう現象には次のような例がある。

- ・さんざか（山茶花）→さざんか
- ・あらたし（新たし）→あたらしい

以前テレビで、「山茶花」を「やまちゃばな」と誤読するタレントを見たことがあるが、確かに漢字から「さざんか」を類推するのは、もはや難しい。ほかにも、「はらつづみ（腹鼓）」を「はらづつみ」、「シミュレーション」を「シュミレーション」と言ってしまう例もあるようだ。

私が覚えていた名称も、こうした現象の1つだったのだろうか? しかし、あのとき叫んだ仲間が誰だったのかも記憶になく、本当にそう言ったのか、みなもそう呼んでいたのかなど、今となっては確かめようもない。いや、私自身、辞書に載る名称を口にするうちに、徐々に記憶が修正されてきた。昔、耳にしたはずの「ヤマガカシ」は、あの遠い赤色の記憶とともに消え去るのだろうか?

有毒種とわかった以上、突然の遭遇は御免被る。が、こんど目の前に現れたとき、自分は「ヤマガカシ」と「ヤマカガシ」のどちらを叫ぶのだろうか? 「カモン!」と呼び出してくれる人がいるなら、もう一度、あのレッドスネークにお目にかかってみたい。

井上裕之（いのうえ ひろゆき）